
かなたへ 第十五部 晩夏夜話異聞

U B O B

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かなたへ 第十五部 晩夏夜話異聞

【Nコード】

N0163M

【作者名】

UBOB

【あらすじ】

「かなたへ」夏の三部作（第12部～14部）のサイドストーリー。
I。

ハルヒ、佐々木の思いともう一つの同窓会での出来事とは……

第一話

コピー・口紅・カレンダー

その一

(前書き

かなたへ 第十四部 夏の点描 <http://ncode.syosetu.com/n75481/> の続編です。

「お祖母ちゃんの家に来てから今日で何日目だろう？」

こつちへ来たのが七月二十三日、水曜日だったから……」

私はそう呟きながらカレンダーに目をやった。

もう二週間か、二十三日、キヨンはひよつとして私を見送るためにわざわざ有希とかに頼んで高速のサービスエリアまで来てくれたのかしら？

そうだったら嬉しいけど……

やっぱり、あの時に言っていた通り、あなたがアイスクリーム食べたいて言ったからタマタマ来ただけだったんだろうか？

毎日メールしてるんだから、聞けば良いのに、恐くて聞けない。私、可笑しいわよね。

キヨンは毎日ちゃんと勉強してるみたい。あんなに課題をあげたらきつと三日もすれば根を上げると思ったのに、やっぱりキヨン、変よね。

夜、海へ一緒にボートで出た時も何だか真面目な事言ってたし。あ、嫌だ、恥ずかしいこと思い出しちゃった。顔が熱くなっちゃった。

あの晩は私、絶対変だった。キヨンに口説けなんて言っちゃったの思い出しちゃったじゃない。

何だかボーンとして何も手に付かない。

毎晩、中学の頃みたいに最近変な夢ばかりみてるし。どうしちゃったんだろう。

私がこんなにならずと悩んでいるのにキヨンたら楽しそうなメールばかりするんだから。

まさか、かなたや有希とあれがらずと一緒に居るなんて事は無いわよね。

勉強しているところの写メ送りなさいって言ったらちゃんと自分の部屋の写真送ってきたものね。

それに遊びながらじゃあの量の勉強は絶対無理よ。

「ハルヒ、根を詰めて勉強してるんだね、冷たいコーヒー淹れたけど、飲むかい」

お祖母ちゃんたら、心配して様子を見に来てくれたんだ。この頃変なことばかり思って勉強に身が入ってないの分かってくれてるんだろうな。

「うん、お祖母ちゃん。ありがと。」

気分が乗らないからそっちに行こうかと思ってたの」

「ハルヒにしてはこっちに来てから小食だし、何か悩み事でもあるの？」

お祖母ちゃんで良かったら聞いてあげるよ。

こっちに来て、寂しくなったんじゃないの？

お母さんも待ってるから電話してあげなさいよ」

「駄目よ、今日は深夜、明日明後日は深夜勤務だもの。」

休ませてあげなくっちゃ」

「そうだ、ハルヒ、ちょっとこれ見て。」

お祖母ちゃん、この間スーパーで海沿いのリゾートとかって言うところの招待券貰ったのよ。明日でも行っでご覧なさい。

女の子はちよっとお化粧して、口紅塗って街に出れば気分が変わる物よ」

「そうかな、うーん、そう……かも。」

天気良そうなら明日でも行ってみる。

ごめんね、お祖母ちゃん、心配掛けて」

そうよ、別にキョンが居なくなたって、気晴らしに遊びにでても良いわよね。

行ってみようかな。

でも、本当はキヨンが来てくれるなら一緒に行きたいのに。
あーあ、私、やっぱり絶対変よね……

その夜も私は孤独と暗い恐れ of 悪夢の夜を迎えたのだった。

彼女はふつと息を吐いて椅子から立ち上がる。両肩をすぼめて上げると首を左右にゆっくりと倒して首筋を伸ばす。ぐつとつま先立ちをして伸びをしようとして思わず立ち眩みをして机に両手をつく。何て態だ、すっかり体が硬くなってるじゃないか。このところずっと机に向かって勉強ばかりしていたからだろうが、もう少し体の事も考えるべきなのかもしれないと独りごちる。机の上に広げた参考書と佐々木と名前の書かれたノート、計算用紙を手早く整頓すると彼女はそろりと部屋を離れ台所へと向かった。

既に深夜。家族はとうに眠りにについている。夏休みだからと自らに課したこなすべき課題の分量を多くしたのだが、やはりその分だけ勉強時間が不足しがち。悪いと知りつつ、つい勉強時間が延びて夜更かしになってしまふ。あともう少し、今夜もまだ眠るわけには行くまい。

食器棚から愛用の白いマグカップを取り出しスプーンでインスタントコーヒーを計り入れると電気ポットから湯を注ぎ先ほどのスプーンでそつとかき混ぜる。

一瞬迷った後、そつとカップに口をつけ、そつと一口コーヒーを口に含んでみた。苦い。やはり余り美味い物ではない。

以前、彼女がブラックコーヒーが苦手だと言ったら意外そうな顔をしていた友人の顔をふと思い出す。

先日、橘君の口車に乗ったおかげで深夜に呼び出してしまったその彼は今頃すっかり眠っている事だろう。

まとわりつく面影を振り払うように首を振った彼女は仕方なくコーヒーシュガーを探し出してカップへ一袋たつぷりと入れる。さらに冷蔵庫からコーヒークリームを取り出しカップにたらし入れると

再び丹念にスプーンでかき混ぜる。口に運ぼうとしたカップの縁についたオレンジ系の口紅の跡にふと目がとまった。

カレンダーを見る、何度見ようがもう、明日、いや、すでに零時を回っているからすでに今日。あの夜、彼に参加すると約束した中学校の同窓会はすでにその日の夕刻に迫っていた。

カップの縁に残ったのは、夕食の後、明日は同窓会があるので夕食は要らないと母親に話したら、何を着て行くかの話になり、あげくに少しはお化粧して行きなさいと無理矢理塗られた口紅の跡である。

周防九曜が無理矢理彼を連れてくるとは思ってもいなかった、あんな事の後、自分はこの顔を下げて彼に再び会えるのだらう。そう思った時、化粧は自分を隠す仮面になってくれるのではないかと少しは期待したのだが、他の同級生の女子や橘に笑われても彼女は中学卒業前に化粧品会社のアドバイザーが講師にやってきて学校でやった化粧の実習以来全く化粧などしてこなかった、そんな自分に今更化粧などが似合うわけもない。

自分の事を彼の前では『僕』としか呼べない弱い自分をいまさら責めたところでどうにもならない、そんな気持ちを紛らわせるためいつにも増して勉強に没頭してきた自分、疲れ果てて倒れる様に眠り、目覚めれば直ぐに机に向かう、休むのは食事と風呂の時だけ、だがどれだけ勉強に集中しようが彼女の中に湧いた冷たい不安が今も彼女を蝕んでいた。

彼女は少し冷めてぬるくなった甘いコーヒーの入ったカップを手にとって、再び自室へと戻っていく。

陸奥かなたと名乗ったあの少女は、ひょっとして今頃彼に寄り添っているのではないだろうか？ ぬぐいきれない不安を更に焦がす様につまらない妄想が彼女を襲った。

「キヨン、僕はどうしてしまったのだろうね……」

　　瞼の端からこぼれ落ちた涙をぬぐうと彼女は再び独り勉強机へと向かった。

第二話 夏の同窓会 第1節

ハルヒの予言の通り、家を出る直前から降り始めた豪雨の中、俺は目深に翳した蝙蝠傘に打ち付けるもの凄いい雨粒の音を聞きつつ、ほとんど小川と化した道路を伝い約束の場所へ急ぐ。

古泉の野郎なら、

「この異常な天候はあなたに同窓会に行つて欲しくないという涼宮さんの願望がもたらしたものに相違い有りません」

と、不機嫌満載のハルヒによるトンデモパワーがもたらした天災確定だとか詰まらぬご託を並べるのかもしれないが……

なあに、こんな雨は毎年の事、夏の後半に恒例の夕立つてやつさ。俺がそう独り言を呟いた瞬間、一瞬足元の地面を流れる泥水に青白い雷光の光が映り同時に下腹に響くドーンという雷鳴が轟く。

「くわばら、くわばら」

俺にキヨンというとても無いあだ名をつけた叔母の口癖が首を竦めて歩みを急ぐ俺の口を思わずついて出る。

すっかりグシヨグシヨに濡れて足元に絡みつくズボン、靴の底からも少し水が染み込んできたかもしれない。ああ、忌々しい。寄りよつてこんな日を同窓会の開催日に選んだ須藤に文句を……

いや、あいつらだって俺と同様この雨の中を会場にやつてくるんだ……

苛立ちと諦めの交錯した心持ちで漸くたどり着いた同窓会場となる建物のドアを潜る。

瞬間ひんやりと乾いた冷房の風が吹きつけ、ドアを閉めた瞬間に雨の音が消え、館内に流れるBGM、まったく先ほどまでの外の世界が嘘の様ではあるが俺の手元で雫を滴らせる傘の存在と足に絡

みつく濡れたズボンがそれが現実だった事を俺に知らしめていた。

ほっと一息ついた俺は入り口で渡されたビニール袋に水を切って傘を仕舞うと、受付で聞いた部屋へ向かう。どうやら会場は此処では一番広い部屋の様だ。案内板を見ながらたどり着いた部屋のドアノブを回し重い扉を開ける。少々薄暗い部屋の天井からはシャンデリアが下がり部屋の隅の天井に下げられたミラーボールの反射を受けてキラキラと輝いている。

「キョン、凄い雨だな、半分ぐらいもう来てるぞ。先に参加費を頼む、それと座席の籤も引いてくれ」

須藤が早速俺を見つけてやって来た。さすが幹事だな。財布を出して参加費を払いながら別の学校に行った連中の近況など世間話をしてしていると国木田が籤の入った空き缶を持ってやってくる。促されて引いた籤の番号を探し当てて座った席の隣は空席、どうやらまだ到着していない誰かがいずれ来るのだろう。

やがて須藤がステージに上がると同窓会の開会を宣言し、乾杯のためのジュースのグラスが配られた。乾杯に続いて幹事の挨拶、学年主任や卒業当時の担任が壇上に登場し、二年ぶりというのは懐かしい様なそうでも無いような微妙なところだなと近くの席の連中と声を交わしていると俺の座っていた席の隣に花柄のノースリーブのサマードレスに白いレースのショールを羽織った女の子がそっと座る。

さ、佐々木？

「キョン、隣の席になってしまった、奇遇だね」

「あ、ああ、雨、大変だったろう？」

「うん、それで遅くなってしまった」

そう言いながら俺を見た佐々木に思わずギクリとした。

ちゃんと化粧してる佐々木を始めて見た。なるほど、こうやってみれば古泉が十人中八人がと言ったのも納得できるというか、これなら誰が見たって美人だとしか言いようがないだろう。

「気がつい……た？　ゴメン、慣れない化粧とか止めようかと思っただけ」

「いや、よく似合ってる、その……凄く……綺麗だ」

うつすらと粉をはたき一層きめ細くなった柔らかそうな頬をほんのりと上気させ、口紅を差し、マスカラまで付けた佐々木というのは俺の完全な想定外だった。　そう言えばハルヒが化粧してデパートに現れた時も驚愕だったが佐々木の場合はそれ以上かな？

「変だろ、分かっているんだが、頼む、もうこの事には触れないでくれないか」

佐々木はよほど恥ずかしいのか耳まで真っ赤になっている、こんな佐々木は俺の記憶には無い、本当に佐々木はこんなに可愛かったのか？

「それより、この間は……済まなかった」

「あれは橘と周防九曜が先走しつちまったんだろ？　佐々木が無茶をしたんじゃ無いことは分かってる。気にするな。そんな事より、どうせ佐々木の事だ、朝から晩までずっと勉強ばかりしてるんだろ、せつかく来たんだからたまにはリラックスしろよ」

「うん、そうするよ」

こいつ、何時もとしゃべり方も違う、絶対変だが何故かその理由を問い詰めるのは憚られる気がした。

そうこうする内にステージに出て近況報告をしたり質問を受けたりする順番が回ってきた。ステージのスポットライトの暑さと眩しさに少々驚きながら当たり障りのない近況報告をすると案の定テレビを見た連中から質問が飛んできた。

「おい、キョン、テレビって何かギャラが貰えるのか？」

「いや、特に、そういえばボールペン一本もらったかな」

「一緒にいた女の子達は誰だ、紹介してくれ」

「あいつらは北高の生徒だ、一応そういう希望が有ったことは伝えとく」

なんともな質問ばかりなので司会の国木田が早々に切り上げてく

れた。

俺が席に戻ろうとした時、俺の足元に出来ていたズボンからしたった雨水で出来ていた水たまりに足をとられ一瞬転びそうになる。さつと佐々木が立ち上がり転びそうになった俺を支えてくれようとしたのだが……佐々木も慣れないヒールの靴に思わずよろけて……結果、俺は膝の上に真っ赤になった佐々木を抱い形で自分の座席に倒れ込んだ。

ふんと佐々木がつけた香水？の匂いが俺の鼻をくすぐる。木蓮み
たいな良い匂い……

俺は思わず佐々木の微かな香りを確かめよう首筋に顔を近づけた。

第二話 夏の同窓会 第2節

多分、その時、俺は目を瞑っていたのだろう。

俺の唇が柔らかかでぷつくらとした温かい物触れているのに気づいてはっと目を開けると、そこには目を瞑り俺と唇を合わせた佐々木の顔が……

次の瞬間、ぱつと佐々木も身を引いた。

「キ、キヨン……」

こんな所で急に……

ビククリするじゃないか」

待て、ステイ、いや、ハウス、俺。

考えろ、何が起こった、佐々木は何を言っている……

事故だ！ 一瞬そう叫びかけたが、真っ赤になって下を向いた恥じらう佐々木を前に今更そんな事が言える物が。

「ご、ゴメン。 ふわつと良い匂いがして、つ……つい……」

「クツクツク、まさか橘君の言った通りになるなんて」

「え、橘が何て言っただんだ？」

佐々木が口を開こうとしたその時、俺の携帯が馬鹿でかい着信音を鳴らした。

このメロディーは、ハルヒだ。

俺は慌てて携帯を開き耳元に当てた。

「な、ナニ@x

ヨゝ！……！！……！！」

耳元で意味不明の罵声が響く。思わず俺が携帯を耳から離す。

マジマジと携帯を見る俺の耳に今度は携帯越しに古泉の声が聞こ

えてきた。

「もしもし、す、すみませんが直ぐ部屋から出てきてください」

うわずった古泉の声というものを始めて聞いた……って、何？

部屋から出てこいだと？

「キヨ、きよん君、直ぐ出てきてください。涼宮さんが大変です
う」

今度は泣きそうな朝比奈さんの声だ。いったい何が起きているんだ？

マサカ、まさかとは思うが俺はちよつと慥然とした表情の佐々木にゴメンと合図をするとすっかり騒ぎ始めている連中の間を通って出口へと急いだ。後ろでピーっと口笛の音と一齐に囁す声が聞こえるがそれが何なのかを確かめる余裕もなく扉にたどり着き、ぐいつとレバーを押し下げ廊下へと出た。

薄暗い部屋から蛍光灯の明かりに照らされた廊下に出ると、そこには朝比奈さんとかなたに両脇を押さえられたハルヒが髪を振り乱して鼻水を垂らしながら意味不明の罵声を発していた。

無表情に突っ立ち俺を漆黒に瞳で見据える長門の足下にへたり込んでるのは古泉？

「ハルヒ、ど、どうしたんだ？」

俺を識別した一瞬、ハルヒはかなたと朝比奈さんを振り切り俺の元へ駆け寄ると一気に俺の首もとのネクタイを掴み締め上げる。

おい、ハルヒ、く、苦しい……

その時、俺の身体に誰かが後ろから抱きつくくとハルヒの手前で俺のネクタイを掴み俺の方へ引き戻す。薄れ行く視界の端にみえたその白い腕は……

「君はキヨンを殺すつもりか！」

佐々木だ！

佐々木が作ってくれた一瞬の間に咳き込みながら慌てて大きく息をする。暗くなりかけていた視界に再び光が戻る。

その刹那、再び渾身の力でハルヒがネクタイを引き寄せる。駄目だ、息が、し、死ぬかもしれん、俺……

再び薄れ行く意識の中、一瞬ハルヒの後ろにからかなたのツインテが揺れ、かなたはハルヒを押さえるとハルヒのネクタイを持つ手を一生懸命解こうとする。

「涼宮先輩、駄目です！ キョン先輩が、死んじゃいます！

駄目、止めてくださいー！」

かなたの声が聞こえた瞬間、俺を後ろから引つ張っていた佐々木の手が緩み俺はハルヒにぶつかるように引き寄せられハルヒに衝突しようとしたその時、世界が色を失った。

今にも光を失いそうな薄ぼんやりとした灰色の世界、一瞬にして全ての聴覚を失ったかの様な静寂につつまれ、直後冷たいリノリウムの床に倒れ込んで這いつくばった俺の耳にドサリとした音が鈍く木霊する。床でたたか打った右の頬と唇がやけに痛く、その痛みと口の中に広がる鉄の味がこの異様な空間が現実である事実を俺につきつける。

閉鎖空間……か？

だが、超能力者でも無い俺が何故こんな所に放り込まれた？

いまだじつとりと湿ったズボンを叩きながら立ち上がる。先ほどまで明るかった廊下を照らす蛍光灯の照明は何層ものフィルターを介して照らしているかのようにとてつもなく暗くなっている。

俺は状況を確認しようと入り口へ向かって歩き始めた。だが角を曲がった所でぐにゃつとした透明な抵抗に突き当たる。どうやら俺が閉じ込められたのはかなり狭い閉鎖空間の様だ。

俺がもう一度見えない壁に手を伸ばした時、先ほどとは違った柔

らかさの濡れた物体とその下部に弯曲した針金の様な細く硬い物体が触れ……また先ほどと同じ感触に戻る？

両手を広げ見えない壁をもう一度なぞると再び先ほどの柔らかい膨らみが現れ……少しずつ壁を突き抜け現れたのはびしょ濡れになり暗闇のなかですらほんのりと素肌とブラが透けて見える白いブラウス、そして胸の膨らみは俺の両手の中にすっぽりと収まり……肩口が覗いたと思ったなら勢いよく全身びしょ濡れのツインテールの少女が姿を現した。

……橘？

「キ、キヨンさん……ど、どこ触ってるんですかあ……！」

橘の放った鉄拳が俺の左の頬をえぐりドスッと鈍い音が俺の脳髓に響く。

尻餅をついて倒れた俺の口の中に再び金臭い塩味が広がり俺はそのまま意識を失った。

背中に激痛が走り、猛烈な息苦しさとともに不意に意識が戻る。

どうやら『活』というものを橘がいてくれたらしい。床に座り込んだまま大きく息をつく俺の肩口から橘がのぞき込む。

「キヨンさん、勝手に失神しないでください。迷惑です！」

「すまん、橘。だが、わざとじゃない、事故だ！
分かってくれ！！」

それに失神したのはお前が俺を……」

「良いですか、キヨンさんは私に何もしていません。

私もキヨンさんに何もしていません。

良いですか、忘れてください。でないと……」

橘の手刀が俺の眼前に迫る。

「わ、わかった。わかったから暴力は止める。いくらくノーでもやり過ぎだ」

「え、どうしてそんな事を……」

「恐らく橘の祖先は甲賀の出。

確か甲賀忍術の家系、甲賀五十三家の名家に氏を橘とする家系があったはずだ。橘は忍者の血を引く其処の出身、言わば現代のくノ一

……」

「やっぱり死んで貰います！」

「待て、これはあつちの世界で佐々木が俺に語った推論だ」

橘が再び大きく手刀を振り上げた時、赤い光の玉が先ほどの閉鎖空間の境界の見えない壁の場所に現れた。プルプルと震えるようにもがきながら壁を突き抜けた赤い光の球は俺と橘の間にスーッとやってくる人型に膨張し、次の瞬間、赤い光が消えた後の暗闇に古泉が半ばよろよろとしながら降り立っていた。

「お取り込み中失礼します。」

橘さん、そして……」

役者がかった仕草で古泉は橘の方から俺の方に向き直りこう続けた。

「貴方もお分かりでしょう。」

……

これは非常事態です」

第二話 夏の同窓会 第3節

「確かに俺が経験しているこの事態が尋常為らざる事は認めてやつても良い。」

だが、閉鎖空間はこれまで幾度となく出来てはお前達が何とか処理してきたんだろう？

確かに神人の地響きがしないが、その分穏やかなだけマシじゃないのか？」

俺は立ち上がると氣勢を削がれて手刀を食らわそうとした形のまま、だらりと腕を上げている橘の手をとって立たせてやる。

「閉鎖空間、そう、確かに我々が閉じ込められているこの空間は閉鎖空間の一種と申し上げても差し支えないでしょう。」

ですが、これまでのどんな閉鎖空間とも完全に異なっている、その事は橘さんならご理解ですよね？」

橘は濡れて張り付いたブラウスを肌から引き離し、スカートの裾を直し、頭を振って髪をぶるつと揺らすと腕組みをして古泉に対峙した。

「ええ、勿論。機関の貴方より先にこの空間に侵入したのは私。古泉さんが入ってこられた方が不思議です。もちろん、キョンさんが入っておられたのがもっと不思議なんですけど」

どうやら相変わらず古泉相手となると橘の鼻っ柱が一段と強くなるようだ。

「僕が侵入するのが遅れたのは長門さん、陸奥さんと状況についての分析と把握の打ち合わせをしていたからです。」

どこかのお嬢さんの様に闇雲に侵入をはかった訳じゃない」

古泉の言葉に橘の顔がたちまちこわばる。

「待て、橘、まずは長門や古泉の意見を聞こう。

古泉の話っぷりだと、どうやらかなりヤバイ状態なんだろう？」

「ええ、その通り。全ての原因である貴方にその様に仲介していた
だくのは少々納得がいかない所ではありますが。

まずはこの閉鎖空間の成り立ちについての我々の推論をお話します。

その前に遺憾ながら我々の一部の認識が誤っていた事はこの際お詫びしておきましょう。

組織の方々には申し訳ないが佐々木嬢を奉ずる組織の方々の言葉を所詮偽物とどうやら軽く見過ぎていた様です。

ですが涼宮さんと佐々木嬢の力は少なくとも閉鎖空間を構成する事については全く互角であったようです」

古泉はにやりとしながら俺を見やると語った言葉を俺が理解するのを待つかのように間を置いた。

ハルヒと佐々木が互角？ いったい古泉は何を言っているんだ？

「ふむ、どうやらこれだけの情報では判っていただけませんか？

この、現在我々がいるところの『閉鎖空間』は涼宮さんと佐々木嬢、双方の力で生み出されたそれぞれの閉鎖空間が融合して出来たものだと考えられます。

恐らく佐々木嬢は貴方を守ろうと安全に隔離する目的で、そして涼宮さんは貴方と佐々木嬢から奪い返そうと、お二人とも同時に同じ力を貴方の周りに展開された。

そして双方の力が癒合する形で形成されたのがこの閉鎖空間だと思われるのです。

ですから私も、その橘さんもこの閉鎖空間に入ろうとしても多大な抵抗を受ける」

古泉はそこまで言う就先ほどの閉鎖空間の境界線まで歩み寄りつつその手を伸ばした。

「そして一旦入ればそこから出ることも出来ない」

古泉の言葉を聞いた橘はいきなり境界線へ向かって走り出し無理矢理身体を押しつけ……見事に弾き返され尻餅をついた。

「キ、キヨンさん……本当です。
出れないですう」

つて事は、俺と橘と古泉の三人がハルヒと佐々木特製の閉鎖空間に閉じ込められたって事なのか……

だがそれより気になるのはハルヒ、そして佐々木の事だ。
二人はどうなっている？

「僕がこの閉鎖空間に突入する時にはお二人はアマチュアレスリングよろしく両の手を組み合って押し合うような形で対峙しておられました、長門さんから貴方の所へ行ってくれるように頼まれてこ

こちらに参りましたので、今、現在、どの様になっているか判りません」

古泉がそう言っ て肩をすくめたとき、俺の腕時計がビビビビと震えた。

KANATA・M< キョン先輩、お二人ともナノマシンで眠っていただきました

「今、あなたから連絡が入った、二人とも長門とかなたで眠らせてらしい。

どうだ、やっぱり出れないか？」

俺の言葉に一瞬にやつとして片眉を上げた古泉は再び境界線に立ち腕を伸ばす。

「意識が無くなってもやはり駄目の様ですね。
橘さん、試していただけますか？」

一瞬古泉を睨み付けた橘がその横に立って境界線に身体を押しつけ……再び弾き返された。

「駄目、さつきと変わりません」

古泉の言った通り、二人の意識が無くても閉鎖空間は保たれているという訳らしい。

「なあ、古泉、ハルヒの生んだ閉鎖空間は、やはり神人を倒さないと消えないのか？」

「ええ、僅かの例外を除いて」

「その例外って、何なんだ？」

「それは僕の方が伺いたいところです、

貴方と涼宮さんが閉じ込めれた閉鎖空間がどの様に解除されたか

……

残念ながらこれまでの事象の詳細を貴方はきちんと教えて下さって居ませんか」

そんな事、言える物か。第一此处にはハルヒが居ないからそれは無理というものだ。

「閉鎖空間から出れた理由はハルヒが元の世界に戻ることを納得した、ただそれだけだ。

だから此处にハルヒが居ない以上どうしようもない。

橘、佐々木の閉鎖空間はどうなんだ？」

「佐々木さんの閉鎖空間には涼宮さんの様な変な物は出てこないです。」

世界を破壊しようなんて、そんなそぶりは勿論、微塵も無いです。佐々木さんの閉鎖空間は唯そこに平穏なまま現実世界と平行に存在する、ただそれだけです。

消えたり、破壊したり、そんな事は一切これまで有りません」

万事休すか…

「ええ、その様ですね。」

いかに涼宮さんの閉鎖空間で戦った経験が豊富であろうと、戦うべき相手の居ない閉鎖空間では私には殆ど力はありません」

古泉はそう言うつと右手に弱々しい暗赤色の光の球を浮かべてみせた。

「そしてこの僅かの力も向けるべき対象が無いのです……
貴方と橘さんを除いては……ね」

その時暗がりには浮かんだ古泉の笑みを俺は一生忘れないだろう。

「そ、そんな、私だって……」

橘が念じるように忍を切るとその人差し指の先端に紫がかった青く薄暗い小さな光の球が浮かぶ。

二人とも落ち着け、どちらもこの閉鎖空間の中では超能力とやらを使える事は判った。

だからまずは落ち着け……

「冗談です、もちろん」

古泉がそう言うつと浮かべた光の球はすつと古泉の右手の掌に吸い込まれるように消える、

「私だって……」

橘の指先の光の球もすう〜と小さくなってかき消すように消滅した。

しいくんとした静寂がその場を支配する。

どうすれば良いんだ……二人のいわば閉鎖空間の専門家、古泉と橘が脱出出来ないという。

その上それぞれの持つ超能力も極めて限定的にしか機能していないらしい。

まずは何故こんな事になったのか、その理由を明らかにすれば何らかの鍵がみつかるんじゃないだろうか？

「古泉、この閉鎖空間の成り立ちをどう考えているのかもう一度話してくれないか？」

一瞬むっとしたかの様な表情を浮かべたが、諦めたかの様に目を瞑り軽く頭を左右に振ると再び俺を見据えて古泉は語り出した。

古泉の語った内容はこうだ。

昼食の時。俺に西瓜を買ってくる様に命じたハルヒは、俺が部屋を出て行くと、SOS団夏のリクレーション、カラオケ大会を俺抜きで今夜やろうと言いだしたらしい。

しかもその場所はこの同窓会場となったカラオケ施設。

俺が重たい西瓜を持って戻った頃には部屋の予約もすっかり終わっていたという事だ。

その後いつもより早めに団活を解散した後、俺が一旦家に帰り、豪雨の中、雨にぬれて会場にたどり着いたはるか一時間以上前からハルヒ達ご一行様は予約した一室にすでに集合していたとはご苦労な

ことだ。

ハルヒは長門とかなたに命じて施設の映像ネットワークのシステムをハッキングさせ、俺たちの集まった同窓会場の様子を、それぞれの部屋の様子を監視する施設のテレビカメラを通し、カラオケルームのモニターで一切合切を監視していたという訳だ。

古泉曰く、俺がステージで自己紹介をして戻ったどさくさに佐々木を押し倒して情熱的な口づけをしているのを拡大した画像で目撃したハルヒは激昂して俺の携帯を呼び出し、そのまま同窓会場へ乗り込もうとしていたらしい。

それではあまりにも周りに迷惑がかかるからと古泉が俺に事の子細を釈明せるため俺を部屋の外に呼び出したら俺に続いて佐々木が現れ、ハルヒと佐々木で俺の引つ張り合いになり、俺が死にそうだから止めてくれと言うかなたの声に佐々木が手を離れた直後、ハルヒの目の前で俺の姿が忽然と消え失せ、古泉が強力な閉鎖空間の発生を感知したという事だ。

俺がこの閉鎖空間に無理矢理連れて来られた直後、俺を何処へ隠したとハルヒが佐々木に飛びかかり、結果二人で乱闘に成りそうなのを朝比奈さんとかなたが必死で引き離そうとしている間、長門が古泉にこの閉鎖空間の異常性について語り、それを確認すべく古泉がこの閉鎖空間へ侵入してきて現在に至る、つまりは全て俺の獣性による結末だと言う。

ハルヒがなぜあの場所に居たのか、その理由を俺は漸く納得した。

あのチェシヤ猫の様なハルヒの笑顔の裏の企みに気がつかなかった俺を呪うべきなのか？

だがその前に俺は誤解を解くべく釈明を図らなければなるまい。

「待て、古泉。」

いくつか大きく真実と異なる点をまず説明させてくれ。

俺は佐々木を押し倒したのでは無く、足下の水たまりで滑って転んだだけだ。

その俺を助けようと立ち上がった佐々木も転んでしまい、まあ、慣れないヒールの靴のせいだろうと思うが、結果俺の膝の上に佐々木が横座りする形になっちまっただけだ。

つまりは純粹な事故、俺が佐々木を押し倒したわけじゃない。

この事は佐々木に聞いたって同じ答えがかえってくる筈だ」

「たとえそれが真実だとしても、涼宮さんがそれを納得されるとお思いですか。

ましてその後の濃厚な口づけを目撃しているのですから」

冷徹な古泉の声ってのは、結構応える。

「いや、それもだなあ」

だがここはもう真実を語って弁明するしかない。おれがそう決意して再び口を開いたとき突拍子もない声が割って入った。

「マ、マ、マ、待って下さい。」

私、余りの事に呆然を自失しておりました。

タイヘン重要、かつ聞き捨てならない情報がこう私の右の耳からすーうつとはいって左の耳から半分出て行った様な気がするんです。

古泉さん、もう一度、ハッキリと仰って下さいます？」

「彼が佐々木嬢と濃厚な口づけを交わした、と申し上げましたが、他に何か？」

「古泉、真実成らざる事を二度も口にするんじゃない、橘が信じちまったらどうするんだ」

俺は慌てて古泉を制するが……

「信じるもなにも、事実の一つ、濃厚な口づけというのは最早、命をかけた契約と同義。

キョンさん、あなたはこれから誠心誠意佐々木さんのために尽くして下さい。

それとも……思い出しました、

先ほど私になさった狼藉三昧……

まさかとは思いますが、極悪非道の多重債務を負った多重契約者じゃ、無いですよね？」

「いえ、そのまさかに間違いありませんね。

先だつての涼宮さんのお母様のご実家に訪れられた前日のリゾートでの出来事、

はつきり申し上げれば人工ビーチでの濃厚な口づけはしっかり機関の画像ファイルに保管されておりますから」

それを聞いた橘は再び指の先に青く明滅する光の球を生みだすと

俺に向けて放とうとする。

「待て、それも誤解だ。あれはハルヒがウイルスにやられて高熱を出していたから治療の為のナノマシンを注入するために仕方なくだな……」

「おや、貴方がナノマシンを生成しうるインターフェース属性を持つておられるとは存じ上げませんでした」

「それって絶対ウソピョンです。

キヨンさんがイントルーダーで無い事は九曜さんの保証付きです」

「はぁ、説明が難しいんだが俺には、俺を守るため長門のナノマシンが注入されているんだ。

で、ハルヒの体調が悪いのに気づいた長門が俺の体内でハルヒ用のナノマシンを調合だかなんだかしらないが要するにこしらえ上げて俺に経口的に注入しろと、

こら、橘、そんな目で見るな。

あそこでハルヒの介護に当たれるのは俺しか居なかったんだ」

「しかし、理由はどうあれ、心を寄せてもいない女性に濃厚な口づけは出来ないのではなからうかと。

少なくとも僕の感覚ではそうですが」

「そうですね、多重債務確定です。

この場合、最新の契約がもっとも重要であり以前の契約の破棄をしなくてはいいけません。

サツサと涼宮さんに引導を渡して佐々木さんの所に来て下さい」

「落ち着け、橘、いいか、良く聞けよ。

佐々木の件は事故だ。

あれは俺と一緒に椅子の上に倒れた佐々木がたまたまおれの膝の上に乗ってしまったのが第一の事故だ。

それでだな、その佐々木から一瞬、木蓮のような良い匂いがした
もんで思わず目を瞑ってその匂いを嗅ごうとしたんだ。

そうしたらだな、何をどう勘違いしたのか俺の顔というか、その俺の唇の行った先に佐々木の唇が来ていた、単にそれだけだ」

「信じられません、良いですか？」

女の子が男の子の膝の上に座らされてですよ、そして目を瞑った男の子が顔を寄せてきたらもうそれはキスしようとしていると思うのが当然の当たり前です。

あの奥手の佐々木さんがキヨンさんに恥を掻かせないように一世一代の意を決してそれに応えたんです。

そ、それを事故ですって……！！！！！！！！！！

「やっぱり死んで貰います!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

橘の指先に灯った青い光の球が一瞬輝きを増す。待て、おちつけ、橘！

俺の腰が砕けて思わずしゃがみ込んだ時、再びビビビビ時計がと震えた。

KANATA・M< 佐々木さんの言葉
『橘君の言った通りになるなんて』の意味を確認して下さい

はい？
かなた、何の事だ？

「キヨンさん、失礼です。今から成敗して差し上げるのに今更、今が何時かを気にするなんて」

かなたが意味もなく連絡してくるはずは無い。そういえば確かに佐々木がはそんな事を言った様な気がしてきた。

「橘、念のためにちよつと聞きたいんだが、良いか？」

両手を挙げてそろりと立ち上がりながら尋ねる。

「何ですか？ いまさら命乞いですか。
信じれません！」

「佐々木が、『橘君の言った通りになるなんて』って、香水の匂いの事を尋ねたときに言っていたんだが、何の事だ？」

俺がそう聞いたとたんに橘の指先の光の球がすつと萎んで消えた。

「そ、それはですね……」

「何でもないです」

一瞬ひるんだ橘に腕組みをした古泉が声をかける。

「ほう、ちよつと気になる言葉ですね。

後学のため、僕もその理由を伺いたいですね。

橘さん、まさか何か良からぬ企みでもされたのですか？」

古泉の言葉に橘は目をキョロキョロさせながら一步、二歩とあとずさる。

「ちよつとした女の子同士の言葉の綾です。

佐々木さんがキヨンさんに会うのが恥ずかしい、自信が無いって
おっしゃるから……

その……橘家秘伝の調合による媚薬の入った特製コロンを今朝、
佐々木さんに差し上げて、

『これがあればキヨンさんもイチコロで佐々木さんにメロメロです、
乙女のぴい〜んちデス』って……

あれ、とっても良い匂いでしょ、でも、そんなに効果があるなら
今度は私が……

え、古泉さん、何ですか？

キヨンさんもそんな怖い顔して、嫌です、冗談ですよ？

まさか、そんなに効くって思って無くて、だから、あの、その……

ええい！ 悪いのはみんなキヨンさんです！！！」

開き直った橘の指先に三たび灯った青い光球はみるみるドツチボ
ール大に膨れあがるとすつと橘の指先を離れ俺の懐に向かって飛び
込んだ。

猛烈な衝撃とともに俺の身体を青い光が包む、もう駄目か……

その時古泉が臙脂色の光球を掌から橘めがけて放とうと構えるの
が目に入る。

俺に光球を放ったばかりの橘は一瞬虚脱状態になったように呆然

とそれを見ている、

「古泉、駄目だ〜!」

全ては一瞬の出来事、気がつくと俺は無我夢中で橋の前に身を投げ出していた。

第二話 夏の同窓会 第4節

橘が俺に向かって放った光球が俺の鳩尾に命中した直後、古泉が橘に向かって放った光球が今度は俺の背中を直撃し、俺はあまりの衝撃に橘の足元に倒れ込んだ。

何時ぞや見た時よりは暗いとはいえ、神人をも倒す古泉の臙脂色の光球を受けた俺は間違いなく死んだ。

ハルヒ、済まない、ずっと傍にいてやれそうにない……

俺の身体は橘の足元で奇妙なバウンドをし、スローモーションの様に引きつった顔で飛び退く橘が見える。

古泉が俺の方に駆け寄ってくる。

バウンドしながら俺は自分の身体を見下ろした。

腹の辺りは青い燐光を放つ十センチばかりの光の層に覆われ、肩口は赤い光を帯びた透明な層に覆われている。

そしてその狭間となる胸の辺りで二つの光がまだらに癒合し、その境界の辺りが紫かったピンク色の強い光を発している。数度のバウンドの後、俺は床の上を浮かび上がる様な形で滑り壁に激突し、さらにその反動で反対の壁に当たり、漸くズルズルと停止した。

見る間に全身を覆う光の斑の層が混じり合いピンク色の光に全身が覆われていく。

俺はゆっくりと立ち上がると呆然と立ちつくしている橘と古泉の元へ歩み寄った。

「キヨ、キヨンさん、大丈夫ですか？」

録音テープが伸びたかのような変な声が聞こえる。どうやら橘が俺に話しかけているらしい。

「我々の光球の直撃を受けて無事だとは……」

古泉、お前の声も伸びた録音テープから再生すると様にならないな。

「ああ、死んだかと思ったが、どうやら生きているらしい」

「キヨンさん、ご免なさい、私、かっと思わず……
なのに私を庇ってくれるなんて」

「橘さんの青い光と僕の赤い光を混ぜてマゼンタという訳ですか。
なるほど、光の合成法則の通りですね」

その時、俺の腕時計がビ・ビ・ビと震える、今度は長門だ。

YUKI・N< 状況の報告を

俺は慌てて時計を口元に運ぶと時計に囁いて事情を説明する。

「橘と古泉の放った光球が俺に当たったが無事だ。

なんだか分からないが俺の身体が紫がかったピンク色の光で覆われているんだ」

KANATA・M< 今、九曜さんをお呼びして協議しています

KANATA・M< このままの状態では世界が崩壊し宇宙的規模で災厄が及ぶ可能性が高い事で意見の一致をみました

KANATA・M< 我々三名が外部から閉鎖空間の破壊を試みます

KANATA・M< 壁に緑色の光が見えたらその場所に先輩が突入してください

YUKI・N< 内部、他二名の協力を要請

「分かった、古泉と橘にかなたと長門からの情報を説明する」

「三名の宇宙人と三名の地球人が閉鎖空間の中と外から一度にアプローチする訳ですね。

他に方法がないならやってみるしか無いでしょう。
了解しました」

「分かったです、私だってちゃんと協力できます。
それに、キヨンさんに助けて貰ったし」

「しかし、涼宮さんが私に与えてくれた力も、佐々木さんが橘さんに与えた力も、恐らく決して彼を傷つけることは能わないのではないでしょうか、全く許し難い事です」

ニヤリとして古泉がそうほざいた。知るか、そんな事。

KANATA・M< 先輩、行きます！

古泉が進入してきた辺りの空間がうつすらと緑色の光を帯び始めた。

「古泉、橘、行くぞ！」

俺は緑に光り輪郭のはっきりしてきた壁にマゼンタに光る俺の両手を重ねてぐっと押し当てる。

俺の手の光と壁の境界から白い光がほとばしる。俺の両脇から橘と古泉がそれぞれ青と赤の光球を呼び出すと俺の押す壁の一点に向けてタイミングを合わせて光球を放った。

俺もさらに力を込めて壁を押す。

その瞬間世界の全てが純白の強烈な光に覆われ……一気に壁の抵抗が消失した。

目を閉じててもなお明るい余りにも強い光に俺の意識も飲み込まれそうになる。

誰だ、おれの身体に抱きついたのは？

「キヨン先輩、私です」

かなた、無事か、良かった。

「此处は事象の特異点です。」

閉鎖空間の破壊に伴うエネルギーに我々が干渉し、ごく僅かな時空の局所的巻き戻しを行う事にしました。

もうすぐこの世界は終焉を迎えます。

巻き戻ってやりなおす世界で橘さんが同じ事をしないように今度は九曜さんが対応してくださいます。

そしてキヨン先輩には私が……

お願いです、今度は絶対に間違えないでください。

いいですね」

かなた、済まない。

俺の言葉に应えてかなたの唇が俺の唇に優しく触れたその時、ま
ばゆい光に包まれて世界は終焉を迎えた。

第二話 夏の同窓会 第4節（後書き）

次は

「あなたへ 第十六部 お月見パラダイス」

<http://ncode.syosetu.com/n0514m/1/>

です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0163m/>

かなたへ 第十五部 晩夏夜話異聞

2010年10月9日19時31分発行